

都市近辺において災害が発生した時、仮設住宅はまた郊外の見知らぬ不便な空き地に行くのだろうか。

マンションやビルが建ち並び、高密度化された都市において、そうしたまとまった場所を確保しておくことは難しく、遠く離れた避難所に行くことも少ない。

それに反し、様々な機能やインフラが集結している都市の中心部は復興も早く、災害時にも最低限の生活インフラが確保される可能性が高い。

ならば、住人が見知らぬ遠く離れた不便な場所ではなく、少しでも近く復興の早い都市の真ん中に仮設住宅を展開することはできないだろうか。

今回、ここではそのような都市近辺の災害をケーススタディとし、都市の隙間を発見し、そこに仮設住宅の展開を考える。



CASE：上町断層帯大地震

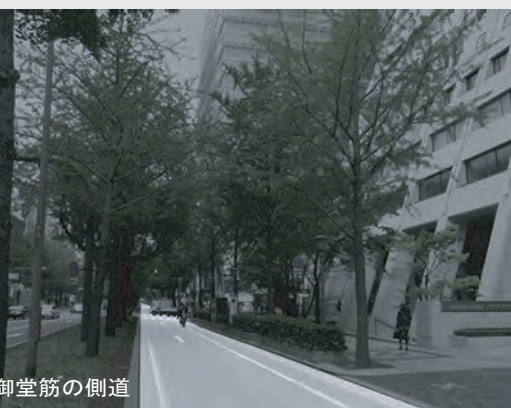
・上町断層帯大地震

大阪府豊中市から大阪市中心部を通り岸和田市に至る全長約4.2kmになる活断層が存在する。上町断層で地震が発生した場合、推定マグニチュード7.6とされ、想定される被害は最も大きい場合で、死者4万2千人、全壊棟数9万7棟、避難者55万人、帰宅困難者20万人と想定される。この被害予測は今後起こりうる地震被害では最大のもので、被害の大きさは阪神大震災を大きく超えるものとなっている。

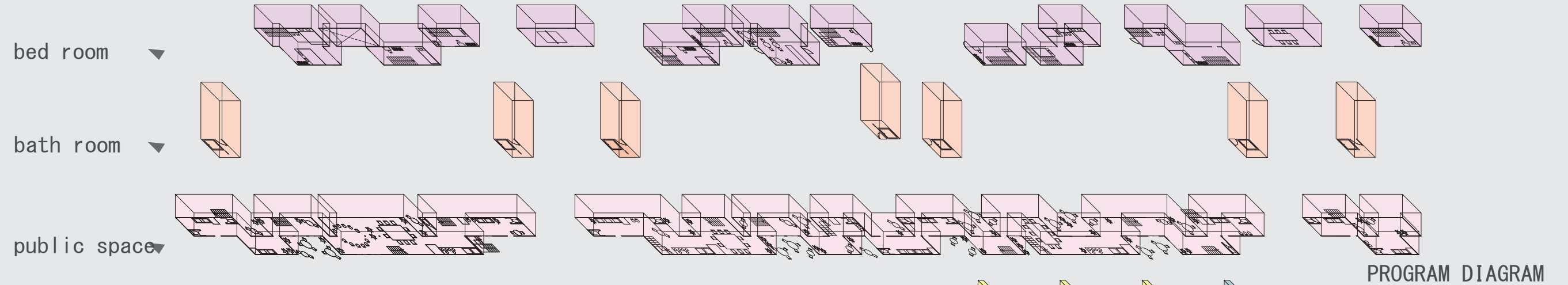
SITE：大阪府大阪市中心部 御堂筋

・御堂筋の概要
大阪府大阪市の中心部を南北に横断する国道。現代の大阪市の都心部は御堂筋を中心に形成されている。
日本の道100選のひとつ。
平日に昼12時間の交通量は、自動車28,000~38,000台、歩行者10,000~26,000台となっている。

・御堂筋の側道
6車線のうち両外側は側道として分けられている。
タクシーが並んでいたり、路上駐車が多い。
最近では側道を歩道空間の一部として転用するプロジェクトも数多く発案されている。



DIAGRAM



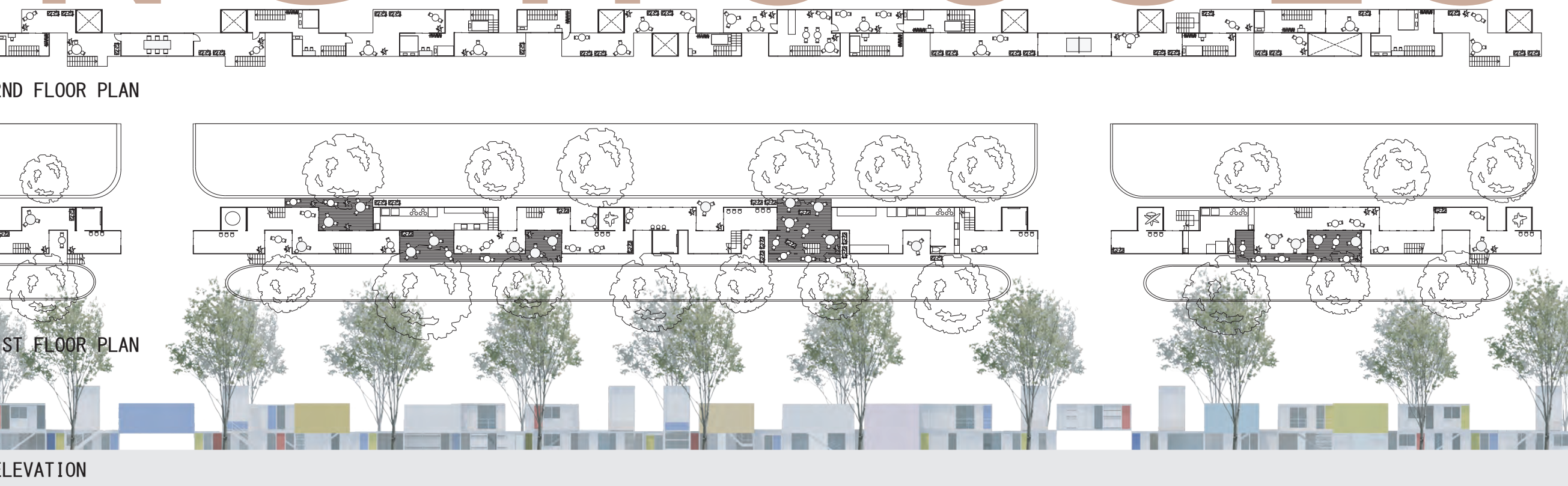
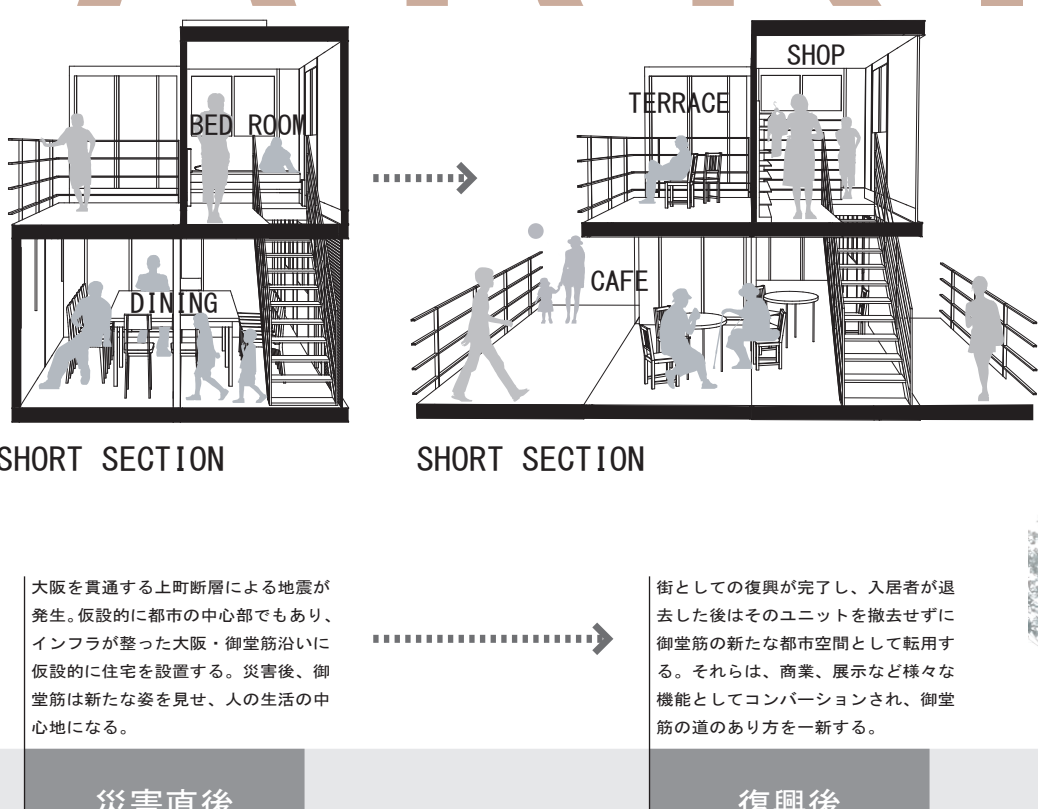
細く長くのびた1階の空間はコミュニケーションの場所。協力して食事を作るキッチン。共に食事をする大きな食卓。お茶をしたり会話を楽しむ喫茶スペース。集会をしたり催しがおこなわれる多目的スペース。会話をしたりテレビを見ながら順番を待つ共同の浴室。いろいろな場所に散らばったお気に入りの椅子。側道に沿って連続した1階の空間は入居者が自由に動くことができる共有空間となっている。

2階は家族、個人の場所。家族だけの時間、一人の時間を過ごす寝室。洗濯物を干したり植物を育てるテラス。共有する日常生活の中で、復興までの時間を過ごす。

災害直後は入居者のための生活の場としての仮設住宅であるが、1年、2年、3年と時間が経つにつれて、徐々に誰も住まなくなったユニットが生まれる。空家となった2階のユニットはショップに、必要のなくなった浴室はギャラリーへと変化していく。1階はキッチンがあった場所を中心としてカフェスペースが広がり、ユニットの壁パネルを取り外すことで開放的な空間が獲得され、御堂筋を行き交う人々を惹き込む賑やかなカフェとなる。復興が進み、空家が増えるにつれて仮設住宅は商業施設に近づいていく。漸進的に完成していくことで商業施設は御堂筋をより豊かで活気ある場所へと変化させる。仮設住宅を建てることによって御堂筋は新たな御堂筋となる。

TIME-LINE DIAGRAM

bed room
wash
bath
kitchen
dining
multi room
chair room
cafe
cafe kitchen
library
garely
shop



御堂筋から仮設住宅を見た風景。車道からは人々の生活の様子が垣間見える。

敷地である側道は両側が分離帯によって挟まれており、2階部分ではアイストッとなる。

1階のダイニングと集会場の様子。様々な世帯が1階の公共空間で交わる。

歩道からは仮設ユニットの組み立て方によって生まれたスペースが、都市の中のアルコーブのような存在となる。

退去後のユニットはギャラリーやショップにコンバージョンされ、御堂筋に新たな賑わいを見せるようになる。